

『青年学校教育に関する論説』昭和十五年三月（文部省社会教育局）

## 私立青年学校の学科編成に就て

矢口 新  
飯島 篤信

### (一) 学科課程調査の実施について

今回岡部教育研究所に於て全国青年学校の学科課程に関する調査を実施したのであるが、以下に述べるのはその中の東京府私立青年学校に関する部分をまとめたものである。調査の結果は未だ単なる問題の提出にとどまるのであるが、記入の労を煩した学校に対する調査としての責もあるし、私立青年学校関係の方々の多少とも御参考になる所があれば幸と考へて御報告する次第である。

此の調査の眼目とする所は現在全国の青年学校に於ては如何なる学科の編成の下に教育を行つてゐるかといふ現状を明かにする事であつて、この目的のために次の三点について回答を求めたのである。

- 1 普通学科、職業科等の名称の下にどんな学科を編成してゐるか。
- 2 それ等の各学科に対して、学年別に如何に時間を配当してゐるか。
- 3 各学科に於てどんな教科書を使用してゐるか。或は特別にプリントを作つてゐるか。

以上の三点について記入する調査票を作成し、これを各調査校に送

付して記入を依頼したのである。調査校の選定に當つては、農山漁村の公立青年学校、中都市の公立青年学校、大都市の公立青年学校、私立青年学校といふ四つのタイプを考へて、その夫々につきおよそ全国の傾向が代表せられる様に注意をはらつて数校宛を選んだ。かくして選定した五三九校に宛てて本年の

一月二十日附を以て調査票を発送したのであるが、発送した学校数と回答のあつた学校数とを類型別に表示すると次の如くである。即ち二四〇校から回答があつたのであるが、その中の九〇校が私立青年学校である。次にこれ等の私立青年学校その中でも東京府私立青年学校（九〇校中の五五校）を中心として学科編成の問題について考察しよう。それには問題を普通学科の見地からと職業科の見地からとの二つに分けて考察するのが便宜である。

学校数 類 型	発 送 数	回 答 数
農山漁村	173	78
中 都 市	97	47
大 都 市	78	25
私 立	191	90
計	539	240

### (二) 普通学科の問題

現在青年学校の学科編成の抛るべき方式としては文部省の教授要目がある。まづこれに照らして集められた調査票の内容をしらべて見るとこれ等の青年学校の学科の編成には大体三つの種類のあることが明らかである。即ち、要目にそのまゝ準拠せるもの、要目と全然異なるもの、半ば要目に準拠し更に学科を加設してゐるもの三である。すべての青年学校が学科の編成の形から見てこの三つのグループに分類せられる。今これを学校のタイプの別に従つて表示して見ると次の如くである。

学科編成方法 類型	要目に準拠せるもの	準拠せざる者	全然異なるもの	加設せるもの	計
農山漁村公立	57	21	17	4	78
都市公立	52	20	17	3	72
私立	38	52	15	37	90
その中 東京府私立	18	37	14	23	55
	146	93	94	44	240

これによつて見ると私立青年学校には要目に準拠しないものが多いといふ一つの特色が見られる。而して要目に準拠しないものの中でも学科を加設してゐるものが多い事は注目すべき事実である。加設せるものは全体で四四校であるが実にその中の三七校が私立青年学校であるといふ点に注意せねばならぬ。この中東京府私立青年学校について見ると、五五校の中で要目に準拠せるものは一八校にすぎず、準拠せぬもの三七校の中全然異つた学科編成のもの一四校、加設せるもの二三校といふ状態になつてゐる。このやうにして全国の青年学校の中に置いて見ると私立青年学校のもつ特殊性がかなり明かになつて来る。即ち私立青年学校に於ては文部省の要目に対する否定的態度が相当に濃厚である。而して要目以外の学科を加設する傾向が強いといふ点に明白な特色を示してゐる。併し、これは要目に全然従つてゐな

いではなくして、より正確にいふならば要目に従つて学科の編成をなしその上更に二、三の学科を加設してゐるのである。此の要目に半ば従はぬといふ学科の編成は公立青年学校にあまり見られない私立青年学校独自の形であるといふことが出来る。同時にこれは私立青年学校が要目に対して提出した独自の要求或は問題として重大な意味をもつてゐる。以下この点について考察して見たい。

此の事実の考察に入る前に、まづ文部省の教授要目といふものについて一言する必要がある。普通学科の要目に於ける学科の編成が従来の一般の学校に見られる学科の編成と全く趣を異にしてゐることは茲に述べる迄もないことである。「普通学科の目的とする所は日常生活に須要なる知識技能を増進し一般的教養を高むるにあり本要目は科別を立てず総合的な題目の下に生活経験の諸相を学習探究せしめ以て此の目的を達成せんことを期せり」とある如く、要目の企図する所は従来の型にはまつた学校知識を排除して现实生活に即した総合的な知識を青年学校の中にとり入れようとする点にあるのである。かゝる見地の下になされた学科の編成が従来にない独自の形をとるのは当然であつて、例へば普通科に於ては講読と名付ける学科に於て国語的な修練と同時に地理、歴史、理科に関する知識を与え、本科に於ては郷土といふが如き生活に即した主題をとつて地理、歴史、理科等の知識を総合的に授け、或は家庭と科学の如き題目の下に家庭生活を基礎としてこれに関連する限りの科学的知識を与へるといふ様な仕組となるのである。要するに、要目の意図する所は具体的な生活の中に生きて働いてゐる知識をそのまゝの総合的な形に於て生徒に与へんとするに在る。青年学校といふ新しい教育の形態の中に於て新しい学科の編成を試みようとするかゝる意図は私立青年学校に於ても十分協力的にとり入れなければならない。先に明かにした如く一般

の青年学校と全く異つた学科の編成を行つてゐる学校があるが、かゝる学校に於てはかくの如き要目の意図をくんで学科の編成の仕方を大いに考へ直す必要がある。これ等の学校に於ては大抵実業学校用の教科書を使用して国語、地理、歴史、理科といふやうに分科して教育を行つてゐる。又、中には国語と歴史とか国語と数学と理科といふやうに二、三の学科しか設けてゐない所もある。これ等の学校には青年学校の教育目的や生徒の実情に即した教育を行はうとする努力の跡を見ることが出来ない。かゝる学校に対しては、文部省の要目を抛り所としてもつと青年学校の形態に適應した学科の編成を行ふことを要望したい。

既に述べた如く私立青年学校の学科編成に於ける最も著しい傾向は一部分に於て要目に準拠した編成をなし、その上更に要目でない所の二、三の学科を加設することである。これは今後学科編成の問題に対して如何なる意味を投げかけてゐるであらうか。

まず加設学科についてしらべて見ると、英語を加設してゐるものが最も多く、その他物理とか化学とかを加設してゐる例もかなり多く見られる。最も多くの学科を加設してゐる場合はこの三つの学科をすべて加設して居り、少い場合はいづれか一科を加設してゐる。此の学科加設の事実はいったい何を意味するのであらうか。加設の状態を見ると、単に一部の学年に加設してゐるのではなくして、殆んどすべての場合に於て全学年を通じてかゝる学科を加設してゐるのである。要目に従つて学科を編成している上に加設学科を置いてゐるのであるから、これは要目のみではそれ等の学校の必要とする教育内容の全体を包括するに足りないことを意味するものと一応考へることが可能である。而してその包含し切れないものを拾ひ上げるのが英語、物理、化学といふやうな学科なのである。英語は要目の中には入つてゐない

のであるが、加設学科を置いてゐる私立青年学校の殆んどすべてが英語を置いてゐることが注目せられる。而して、商業方面の私立青年学校では中等学校用の英語教科書でやつてゐるのが多いのに対して、工場青年学校では大抵工業英語といふものを加設して教へてゐる。工場の生活に於ては材料、機械、工具等の名称に於て又その他の種々の術語に於て多くの英語が日常的に使用されてゐるので、優秀な産業人となるためにはかゝる実生活に必要な英語の知識を獲得することがどうしても必要なのである。かうした實際の必要に迫られて要目でない所の英語を加設してゐる学校が多いのであらう。この点は要目に於て今後研究を要する問題である。

次に物理及び化学の加設であるが、これは殆んど工場青年学校に限られてゐるといつてよい。このことは特に工場青年学校の方面に於て要目による科学的知識の教育に対する不満の存することを物語つてゐる。然らばかゝる物理や化学の加設が工場青年学校に於てどうして必要なであらうか。英語は要目中には全く含まれてゐないのであるが、これに対して物理化学の如きはさういふ名称の学科こそ設けてないが知識としては要目の中に現に包含されてゐるのである。普通科に於ては講読の教材として理科的な知識を授けることになつて居り、本科に於ては郷土、家庭と科学、自然界の理法、宇宙と地球、産業といふ総合的な題目に於て科学的知識を与へる様に要目が作られてゐるのである。然るに此の要目によつて編成せられた教育内容を授ける他に更に物理とか化学といふ学科を設けてゐるといふことは一体何と解釈すべきであるか。それは要するに以上のやうな要目の中に盛られた科学的知識だけでは多くの工場青年学校の要求を充たす事が出来ぬといふことである。而してこれが現実の問題としては要目に準拠して作られてある青年学校教科書によつて科学的知識の教育となすの

みでは満足が出来ず、実業学校用の物理学教科書や化学教科書等を用ひてこの弱点を補強するといふ結果になるのである。

それでは文部省の要目による科学知識の教育では何故工場青年学校の教育的要求を満足せしめ得ないのか。それは次の如く考へる事によつて理解されるのではなからうか。郷土、家庭と科学、自然界の理法等々の題目は農村青年にも適するやうに選ばれてゐるので非常に一般的普遍的である。工場青年学校の立場から見ればそれ等は工場の中で働く青年に必要な知識をそれに依つて統合する生活的な主題としては甚だ中心を外れたものである。さういふ主題によつて統合するのは工場青年に必要な科学的知識を十分にその中に包含することが極めて困難である。工場青年に必要な科学的知識は家庭と科学よりは工場とか機械といふやうな主題によつてよりよく総合せられるのである。世間に出てゐる青年学校用教科書に盛られた知識内容が工場青年学校の教育的要求を充たし得ないのはこの点に帰因するといつてよからう。かゝる内容の貧弱さを他のものに依つて蔽はんとして結局物理とか化学といふ学科を加設して物理化学について一通りの概論的な説明のなされてゐる教科書を使用するといふ結果になるのである。

以上の事実は要目に於ける学科の編成の方式に対して提出された一つの問題として重大な意味をもつてゐる。それは一言にしていへば要目に於ける教育内容の総合の方法に欠陥があるといふ事である。日常生活の経験を中心に知識を総合的に与へるといふのであれば、夫々の青年学校が各自の教育対象に最も適合した方法で教科内容の構成を行ふことが可能な様にもつと融通性のある要目を作るべきであらう。この点は要目に於て今後大いに研究を要する問題である。

以上述べた所は学科を加設してゐる学校が多いといふ事実が、学科

編成の問題に關して如何なる意味をもつてゐるかについての考察である。多くの私立青年学校は学科の編成に關して以上の如き問題を提出した。然らばそれ等の私立青年学校は要目に対する不満をもつてゐるといふのみにとゞまらず、更にそれ以上に青年の日常生活を中心に教育内容を構成するといふやうな新しい学科編成の考へをもつてゐるであらうか。この点は頗る疑問といはねばならぬ。若しさういふ明確な考へがあるのであれば、現在の如く一般的抽象的な内容をもつた物理学とか化学といふ学科を特別に設けてゐることは到底理解出来ない。一部分は要目に従つた総合的な学科を置き一部分は分科的な学科を置くといふやうな現在の二元的な学科の編成は奇妙な矛盾を含んだものである。若しも現在既に新しい学科の編成の考へがあるのであれば、現在の如き不徹底な学科編成をすて去つて日常の仕事を中心とした学科の構成といふ新しい方向に向つて進んでもらひたいものである。

生徒の日常生活を中心にした新しい学科の構成こそは私立青年学校に課せられた最大の課題である。生徒が日常職場に於て働かした働かせねばならぬ所のあらゆる知識や技術を分析して、集積し、これを一つの教育内容の体系に構成するのである。かくして必要なすべての教育内容が集められた場合、要目はそれに依つてこれ等の教材を排列する一つの拠所として考へればよい。ともかく教育内容の構成は青年の日常生活を直視してゐる教育者の手によつてなされなければならない。

以上の如き新しい方向に於ける教育内容の構成はそれがもつ意味を意識してかどうかはわからぬが既に萌芽的なものとしてはあらはれて來てゐる。それは自己の工場の製品について教へるとか商品ならば自己の取引の商品について教へるとか、或は既製の教科書ではなく

自己の青年学校に適した教科書を特別に作るといふやうな多くの私立青年学校がなしてゐる様な教育的努力である。さういふ試みは新しい学科の編成の方向に向いてゐるものであるといつてよい。併し乍ら教科書を自ら作るといつても世間の教科書と同じやうに抽象的なものを作るのでは努力しても意味がない。さうではなくしてあらゆる教育的な努力が日常生活や仕事に即した教育といふアイデアによつて総合される時にはじめて青年教育の新しい道が大きくひらけて来るのである。

### (三) 職業科の問題

次に職業科の学科の編成に就いて述べよう。所で此の点に就ては職業の種類が区々であるから到底一概に論ずることは出来ない。又職業科に就ては文部省の要目に規定された所を各学校がかなり自由に取捨選択を行ふことが出来るし、又場合によつて文部省の教授要目に該当しない職業科を課す如き場合には、各学校に於て要目を一応の標準として全然別個の要目を作成実施することを許されてゐる。

以上の如き点から職業科に就ては益々一般な傾向を述べることが困難となつて来るのである。

併しながらそれは文部省の要目に一定の方針がないといふ事ではないのであつて、職業科の構成内容には以上の如き自由が認められてゐても、これらの教材を教育内容として組織構成する方法として文部省の要目に厳然たる方針が提示されてゐる。即ちそれは総合的教育といふ方針である。此の点に就ては、例へば教授要目実施上の注意の農業科の所に於て、「実施要目の作成に当りては農業の各部門に分ちて示したる教材を別個に取扱ふことなく其の連絡統合に力め實際経営の指導に適合せしむべし」とし、或は工業の各要目を実施するに對す

る注意として常に生徒の体験に基き實際生活に即して「教授及訓練を施し」と云ひ、又要目に於ける教材排列の方法も日常作業に即して易より難に就くといふ系統的な方法がとられてゐるのである。これは商業に於ても亦同様であつて、「教材は商業実務の順序及生徒の理解の程度を考慮して排列したり」とある。

以上の如く文部省の要目の方針に見られる所は、職業科に於ても連絡統合といふ事であつて、従来の実業学校に見られる如き教材を分科して置くといふ方針をとらないのである。この点は大いに注目すべき事であつて、青年学校の教育の一大特徴とも云ふべきものである。文部省の要目作製の具体的な点はともかくも、この方針そのものは青年学校の生徒の如き日常実務に従事する青年に對して職業教育をなす場合には当然とらるべき方法であると考へられる。さて東京府に於ける私立青年学校の教育がこの文部省の方針に對してどこまで従つてゐるかはかなり重大な問題といふべきであらう。

此の点に就て我々の調査せる所によれば、甚だしく悲觀的であるといはねばなるまい。東京府の私立青年学校は言ふまでもなく、工業か商業をその職業科にもつてゐるのである。特に工場附設の青年学校、商店附設の青年学校がその殆んど全部を占めてゐるのである。従つて生徒の日常生活に即して、すべての教材もその日常生活といふ点から連絡統合して職業科を編成することは最も容易な筈である。併しながら実際にはかゝる教材の編成が行はれてゐると見らるべきものは皆無と稱して差支へないのであつて、一概に論ずれば皆工業学校乃至商業学校の程度を低くした様なものであり、何れも分科主義に基く教科の編成を行つてゐるのである。

勿論東京府の私立青年学校の如きは、いはば職業青年学校であつて、同じ職業に従事する青年に對して職業教育をなしてゐるのであるか

ら、その職業科は實際生活に必要なものが授けられてゐることは充分認められる。これは当然である。併しながらその實際生活に即した教科にも又種々段階があるのであつて、例へば機械工作に従事するが故に機械工作法を授け、又機構学を授けるといふものも一つの方法である。併しながらそれは決して教材の連絡統合に注意してゐるとは言ひ難いのであつて、その点で真に實際生活に即した教材の編成とも言ひ難いと思ふ。實際生活は決して一般的な機械工作法や、一般の機構学や一般力学に分析されたものではないのである。これらの知識、技術が実生活の中でそれぞれの地位をもつてゐる筈である。従つてこれらの学科も実生活の点から一度編成をし直さるべきものであつて、その生活に於て占める地位に立つて夫々教育内容として編成さるべきものである。かくの如き見地からはじめて真に實際生活に即した職業教育がなされ得るのであつて、従来の如き分科的な方法によつてはその教育の効果率は甚だしく低いといはざるを得ない。

以上の如き教材の連絡統合については各私立青年学校で夫々研究さるべきものである。この点文部省の要目は何といつても一般的であるべきを得ない。私立青年学校には要目を標準とした夫々の職業に即した教材の編成が現在重要な任務として課せられてゐると思ふ。

若し真に教材の連絡統合した職業科であるならば、或は文部省の要目に於ける如く、職業科は一科目として授けらるべきものであるかも知れない。一切の教材が日常作業の事に関してそれに即してどこかに置かれるならば、分科といふ事はあり得ない事であらう。しかしそれは今後實際家の努力にまつこと多いのであつて、この見地から大いに努力してかゝる教科の編成に邁進されんことを望むものである。

次に職業科の教材は如何なる所からとられてゐるかに就て一言する。即ち職業科を編成してゐる学科にはどんなものがあるかである。

既に前述した如く實際の職業生活に即したものを教材にとるならば、職業科といふも従来考へられた如き狭い専門学校的な学科のみが職業科とは言ひ得ないであらう。かなり広い部分に亘つてその教材が蒐められてよい筈である。

この意味で多くの工業青年学校に於て、工業、英語、数学、物理、化学、力学等の所謂普通学科学的なものまでがこの職業科にとり入れられて來てゐることは充分注目し得る。又商業青年学校に於ても要目にある商業、珠算の外に例へば呉服屋に於ける呉服算術、百貨店に於ける商品知識等がある。これらは皆商業、工業に於て何れかの所で必要な知識であるから、要目になくとも夫々の青年学校に於て自ら行ふべきものであることは言ふを待たない。

かくの如く職業科の教材としては、職業に必要なものはあらゆるものがとられるべきである。たとえ従来の普通学科学的な概念をもつたものでも職業に占める地位の上から再検討されて職業科として構成されてしかるべきものである。それが出来るだけ深く、広くとられる所に生徒の職能者としての教養も益々高くなるものである。こゝに注意すべきは、例へば實際生活に必要なものに英語があるとしても、それが必ずしも従来の工業学校で与へてゐた様な英語であるかどうかは疑問であることである。単に英語が必要であるといふ点から工業学校の英語をそのまま授けたり、又商業に於て商品であるといふので従来の商品学を授けたりする事は一応考慮する必要があるのである。この辺の所に現在の私立青年学校の職業科の編成が問題とされる理由があるのではあるまいか。勿論私達の言ふ事は程度を低くせよといふ事ではない。程度は結局の所いくら高くてもよい否最高の程度に迄授けらるべきであるが、それはしかし最後の目標がさうであつて、その英語なり商品知識なりの教科そのものはあくまで實際生活に即した所

から出発しなければならぬ。そこから出発して最後までそこに即した如き英語、商品学があり、しかもそれが最高の程度のものであるといふ事が望ましいのである。これは決してさう困難なことではないのであつて、従来我々の考へてゐる教科は一般的教養としてのそれが多く、それを本にしてその構成も、教授の方法も発達して来てゐるのであるが、この一般陶冶の考へ方の束縛からはなれて、まるで異つた内容の英語なり商品学が出来上がることが今後の学科の発達として望まれてゐるのである。

次に職業科に於ける実習について一言したい。我々は私立青年学校に於ては実習が最も重要視され、又こゝに一切の教養の出発点を求めるべきであると考へる。青年学校はやゝもすれば現在まだ過去の実業補習学校時代の残滓をもつてゐて、低い程度の実業常識を与へるといふ考へ方にとらわれてゐる様である。我々は多くの青年学校に於て、技能者養成所の問題について多くの質問を受けた。そして技能者養成は中堅職工の養成機関であり、青年学校は一般職工の一般教養機関であるといふ考へ方にぶつかつたのである。かゝる考へから技能者養成令による養成工には多くの実習を課し、青年学校の生徒にはかゝるものを課さないといふ事実をよく見たのである。これは甚だ誤れる考へ方であつて、かゝる考へ方では青年学校の発達が望まれないのである。技能者養成所に於ては、三年間に五千時間の実習が課せられてゐるが、青年学校に於ても出来得るならば実習はうんと多く課せられるべきである。実際には、現在いろいろの関係から不可能であらうが、少くとも考へ方としてはかゝるものでなければならぬ。中堅職工等といふものはその上に立つてはじめて考へらるべきもので、一般の見習工から次第に教育の結果優秀なるものが自ら引き出されてくる筈である。それらのものは単に中堅職工でなくとも、もつと高い広い職能的教養

を授けることにより最高の技術者にまで教育されるべきものである。

かゝる考へ方から、青年学校に於ては実習についてかなり積極的な態度が望ましい。所が一般私立青年学校ではかゝる考へ方は大体して居ない様に考へられる。これは延いては単に実習のみの問題でなく、広く他の学科にも影響を与へ青年学校をして、職能教育から遊離させ往年の実業補習学校的存在たらしめ、切角の教育も大して効果のないことにするのである。青年学校に於ては、まづその職場の製品に関する技術の教育が第一に行はるべきである。それには実習が最も合理的に、如何に単純な作業も深い原理にもとづいて教育されねばならぬ。この意味で実習に教科書を用ふることはかなり必要である。実習が単に従来の慣習と形を模倣することであるかの如く考えられ、それに対する科学的説明が与へられないといふ如きことは我が国の技術発達の上に甚だ望ましくないことである。

而してこの技術実習が本になつて、それに必要な教養が一切その技術実習の点に統合されて、その上に職業科が構成されるとき、真のよき職能教育をなし得る職業科が編成されるであらう。

(完)